

## 基本計画書

基本計画								
事項	記入欄						備考	
計画の区分	学部設置							
フリガナ設置者	フクイカギン カイブケン 学校法人 金井学園							
フリガナ大学の名称	フクイカギ ヲウダイガク 福井工業大学 (Fukui University of Technology)							
大学本部の位置	福井県福井市学園3丁目6番1号							
大学の目的	本学は、本学園の建学の精神に基づいて、質実剛健な気風と愛国心の涵養に努め、人格円満にして徳性の高い社会人を育成するとともに、教育基本法及び学校教育法の定めるところに従い、高い教養と工学に関する高度な専門知識・技術を身に付けた人材を養成することを使命とし、教育研究活動を通じて地域社会の発展に寄与するとともに、広く人類社会の福祉に貢献することを目的とする。							
新設学部等の目的	スポーツ、健康に関する基礎知識・基礎理論への総合的・学術的な理解を持ち、科学的な視点からスポーツ・健康産業界や地域スポーツ指導の発展に貢献できる人材を養成する。							
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	取容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地
	スポーツ健康科学部 (Faculty of Sports and Health Sciences) スポーツ健康科学科 (Department of Sports and Health Sciences) 計	年	人	年次人	人	学士(スポーツ健康科学)	年月 第年次	福井県福井市学園 3丁目6番1号
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	福井工業大学 入学定員変更 工学部 機械工学科〔定員減〕 (△20) 建築生活環境学科〔定員減〕 (△5) 原子力技術応用工学科〔定員増〕 (5) 工学部 電気電子情報工学科 (2年次編入学定員) (廃止) (△3) (3年次編入学定員) (廃止) (△3) 機械工学科 (2年次編入学定員) (廃止) (△3) (3年次編入学定員) (廃止) (△3) 建築生活環境学科 (2年次編入学定員) (廃止) (△3) (3年次編入学定員) (廃止) (△3) 原子力技術応用工学科 (2年次編入学定員) (廃止) (△2) (3年次編入学定員) (廃止) (△2) ※(2年次編入学定員は平成28年4月学生募集停止) (3年次編入学定員は平成29年4月学生募集停止) 名称変更 平成27年4月名称変更予定 工学部 電気電子情報工学科 → 電気電子工学科 平成27年4月名称変更予定 工学部 建築生活環境学科 → 建築土木工学科 学科の廃止 工学部 環境生命化学科 (廃止) (△45) (2年次編入学定員) (△2) (3年次編入学定員) (△2) 経営情報学科 (廃止) (△65) (2年次編入学定員) (△3) (3年次編入学定員) (△3) デザイン学科 (廃止) (△60) (2年次編入学定員) (△2) (3年次編入学定員) (△2) 産業ビジネス学科 (廃止) (△60) (2年次編入学定員) (△2) (3年次編入学定員) (△2) ※平成27年4月学生募集停止 (2年次編入学定員は平成28年4月学生募集停止) (3年次編入学定員は平成29年4月学生募集停止) 学部の設置 環境情報学部 環境・食品科学科 (50) (平成26年5月届出予定) 経営情報学科 (80) (平成26年5月届出予定) デザイン学科 (50) (平成26年5月届出予定)							

教育課程	新設学部等の名称		開設する授業科目の総数				卒業要件単位数					
			講義	演習	実験・実習	計						
	スポーツ健康科学科		73 科目	56 科目	16 科目	145 科目	124 単位					
教員組織の概要	学部等の名称		専任教員等					兼任教員等		平成26年5月名称変更届出予定 平成26年7月名称変更届出予定 平成26年5月届出予定 平成26年5月届出予定 平成26年5月届出予定		
	新設分	スポーツ健康科学部	スポーツ健康科学科	7 (5)	1 (1)	5 (5)	0 (0)	13 (11)	0 (0)		22 (11)	
			計	7 (5)	1 (1)	5 (5)	0 (0)	13 (11)	0 (0)		22 (11)	
	既設分	工学部	電気電子工学科	8 (8)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	10 (10)	0 (0)		17 (17)	
			機械工学科	5 (5)	1 (1)	2 (2)	0 (0)	8 (8)	0 (0)		15 (15)	
			建築土木工学科	9 (9)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	14 (14)	0 (0)		14 (14)	
			原子力技術応用工学科	8 (8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	8 (8)	0 (0)		9 (9)	
			環境情報学部	環境・食品科学科	6 (6)	3 (3)	1 (1)	0 (0)	10 (10)		0 (0)	11 (10)
			経営情報学科	4 (4)	4 (4)	2 (2)	0 (0)	10 (10)	0 (0)		11 (11)	
			デザイン学科	6 (6)	3 (3)	1 (1)	0 (0)	10 (10)	0 (0)		20 (19)	
その他(基盤教育機構)	3 (3)	2 (2)	1 (1)	7 (7)	13 (13)	0 (0)	-					
計	49 (49)	18 (18)	9 (9)	7 (7)	83 (83)	0 (0)	97 (94)					
合計	56 (54)	19 (19)	14 (14)	7 (7)	96 (94)	0 (0)	119 (105)					
教員以外の職員の概要	職種		専任		兼任		計		大学全体			
	事務職員		75 人 (75)		0 人 (0)		75 人 (75)					
	技術職員		0 (0)		0 (0)		0 (0)					
	図書館専門職員		6 (6)		0 (0)		6 (6)					
	その他の職員		0 (0)		0 (0)		0 (0)					
計		81 (81)		0 (0)		81 (81)						
校地等	区分	専用	共用	共用する他の学校等の専用		計		借用面積: 68,608㎡ 借用期間:20年 大学全体				
	校舎敷地	86,863 ㎡	0 ㎡	0 ㎡		86,863 ㎡						
	運動場用地	135,541 ㎡	0 ㎡	0 ㎡		135,541 ㎡						
	小計	222,404 ㎡	0 ㎡	0 ㎡		222,404 ㎡						
	その他	93,063 ㎡	0 ㎡	0 ㎡		93,063 ㎡						
合計	315,467 ㎡	0 ㎡	0 ㎡		315,467 ㎡							
校舎	専用	共用	共用する他の学校等の専用		計		大学全体					
	46,177 ㎡ ( 47,769 ㎡)	0 ㎡ ( 0 ㎡)	0 ㎡ ( 0 ㎡)		46,177 ㎡ ( 47,769 ㎡)							
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設		大学全体					
	63 室	27 室	96 室	7 室 (補助職員 0 人)	2 室 (補助職員 0 人)							
専任教員研究室		新設学部等の名称		室数								
		スポーツ健康科学部スポーツ健康科学科		13 室								
図書・設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	大学全体共用: 図書 71,585冊				
	スポーツ健康科学部	72,581 [65]	42 [ 0 ]	9 [ 0 ]	6	43	0					
	スポーツ健康科学科	(72,391 [53])	( 24 [ 0 ] )	( 9 [ 0 ] )	( 6 )	( 20 )	( 0 )					
計	72,581 [65] (72,391 [53])	42 [ 0 ] ( 24 [ 0 ] )	9 [ 0 ] ( 9 [ 0 ] )	6 ( 6 )	43 ( 20 )	0 ( 0 )						
図書館	面積	閲覧座席数		収納可能冊数				大学全体				
	1,490 ㎡	240		163,556								
体育館	面積	体育館以外のスポーツ施設の概要						大学全体				
	2,713 ㎡	柔道・剣道場トレーニングセンター										
経費の見積り及び維持方法の概要	区分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	大学全体			
	教員1人当り研究費等		114千円	114千円	114千円	114千円	- 千円	- 千円				
	共同研究費等		1,320千円	1,320千円	1,320千円	1,320千円	- 千円	- 千円				
	図書購入費	276千円	267千円	261千円	239千円	201千円	- 千円	- 千円				
	設備購入費	18,508千円	39,519千円	14,938千円	2,435千円	0千円	- 千円	- 千円				
	学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次					
1,500千円	1,250千円	1,250千円	1,250千円	- 千円	- 千円							
学生納付金以外の維持方法の概要		私立大学等経常費補助金、資産運用収入、雑収入等										

既設大学等の状況	大学の名称	福井工業大学							
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
		年	人	年次人	人		倍		
	工学部	4	500	2年次 20 2年次 20	2004	学士(工学)	0.99	昭和40年度	福井県福井市学園3丁目6番1号
	電気電子情報工学科	4	80	2年次 3 3年次 3	365	学士(工学)	0.85	昭和40年度	同上
	機械工学科	4	100	2年次 3 3年次 3	415	学士(工学)	0.93	昭和40年度	同上
	建築生活環境学科	4	65	2年次 3 3年次 3	204	学士(工学)	0.95	平成24年度	同上
	建築学科	4	-	-	-	学士(工学)	-	平成21年度	同上
	土木環境工学科	4	-	-	-	学士(工学)	-	平成21年度	同上
	原子力技術応用工学科	4	25	2年次 2 3年次 2	105	学士(工学)	0.78	平成17年度	同上
	環境生命化学科	4	45	2年次 2 3年次 2	185	学士(工学)	1.16	昭和48年度	同上
	経営情報学科	4	65	2年次 3 3年次 3	265	学士(工学)	1.19	昭和62年度	同上
	デザイン学科	4	60	2年次 2 3年次 2	245	学士(工学)	0.82	平成21年度	同上
	産業ビジネス学科	4	60	2年次 2 3年次 2	220	学士(工学)	1.27	平成23年度	同上
大学の名称	福井工業大学大学院								
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	年	人	年次人	人		倍			
工学研究科博士前期課程	2	25	-	50	修士(工学)	0.72	昭和60年度	福井県福井市学園3丁目6番1号	
応用理工学専攻	2	17	-	34	修士(工学)	0.67	平成24年度	同上	
社会システム学専攻	2	8	-	16	修士(工学)	0.81	平成24年度	同上	
工学研究科博士後期課程	3	6	-	18	博士(工学)	0.05	平成2年度	同上	
応用理工学専攻	3	4	-	12	博士(工学)	0.08	平成24年度	同上	
社会システム学専攻	3	2	-	6	博士(工学)	0.00	平成24年度	同上	
附属施設の概要	該当なし								

教育課程等の概要															
(スポーツ健康科学部スポーツ健康科学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
人文社会	A群	哲学入門 - 人生哲学	1後	2		○								兼1	
		心理学入門 - 心のはたらき	1後	2		○								兼1	
		女性学入門 - 女性の生き方論	1前	2		○								兼1	
		コミュニケーション論	1前	2		○								兼1	
	B群	人と社会	2前	2		○								兼1	
		法学入門 - 市民社会と法	2前	2		○								兼1	
		日本国憲法	2後	2		○								兼1	
		経済学入門 - 現代社会と経済	2後	2		○								兼1	
	C群	マスコミ論 - 新聞を読み解く力	3前	2		○								兼1	
		日本文化の歴史	3後	2		○								兼1	
		比較文化論 - 世界の文化	3後	2		○								兼1	
		文学入門 - 小説・詩の世界	3前	2		○								兼1	
	小計 (12科目)	—	0	24	0	—			0	0	0	0	0	兼10	
教養分野科目	外国語	ベーシックコミュニケーション I	1前	1			○							兼2	
		ベーシックコミュニケーション II	1後	1			○							兼2	
		アドバンストコミュニケーション I	2前	1			○							兼2	
		アドバンストコミュニケーション II	2後	1			○							兼2	
		テクニカルコミュニケーション I	3前	2			○							兼2	
		テクニカルコミュニケーション II	3後	2			○							兼2	
		テクニカルコミュニケーション III	4前	2			○							兼2	
		テクニカルコミュニケーション IV	4後	2			○							兼2	
		ビジネスコミュニケーション I	3前	2			○							兼2	
		ビジネスコミュニケーション II	3後	2			○							兼2	
		ビジネスコミュニケーション III	4前	2			○							兼2	
		ビジネスコミュニケーション IV	4後	2			○							兼2	
		リスニング I	1前	1			○								兼4
		リスニング II	1後	1			○								兼4
		TOEIC I	2前	2			○								兼2
		TOEIC II	2後	2			○								兼2
		TOEIC III	3前	2			○								兼2
		TOEIC IV	3後	2			○								兼2
		海外語学研修 I	1前・後	4			○								集中、兼1
		海外語学研修 II	2前・後	4			○								集中、兼1
		海外語学研修 III	3前・後	4			○								集中、兼1
		海外語学研修 IV	4前・後	4			○								集中、兼1
	小計 (22科目)	—	10	36	0	—			0	0	0	0	0	兼4	
キャリア形成	日本語の基礎	1前	2			○								兼1	
	日本語表現法 I	1後	2			○								兼1	
	日本語表現法 II	2前	2			○								兼1	
	キャリアデザイン I	2前	1			○			1		1			共同	
	キャリアデザイン II	2後	1			○			1	1				共同	
	キャリアアゼミ I	1前	1			○			2		3				
	キャリアアゼミ II	1後	1			○			2		3				
	キャリアアゼミ III	3前	1			○			3		1				
	キャリアアゼミ IV	3後	1			○			3		1				
	インターシップ A	3前	2			○			1						
インターシップ B	3後	2			○			1							

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
教養分野科目	キャリア形成	地域共生学	2前		2		○			1						
		テクニカルライティング	1後	1				○		1		3				
		プレゼンテーション	1後	1				○		2		1				
		課題研究	2前	2				○		6	1	5				
		コンピュータリテラシ	1前	2				○		2						
	小計(16科目)		—	14	10	0	—			7	1	5	0	0	兼1	
	科学基礎	基礎数学A	1前		2		○									兼3
		基礎数学B	1前		2		○									兼2
		基礎数学A	1後		2		○									兼1
		科学リテラシ	1前		2		○			1		1				兼6、おにバス
		基礎統計学	2前		2		○				1					
		統計学演習	2後		2			○				1				
		基礎生物学	1前		2		○									兼1
		基礎生命科学	1後		2		○									兼1
	基礎健康科学	1後		2		○			1							
	社会調査論	2後		2		○									兼1	
環境・情報倫理	1後		2		○									兼1		
小計(11科目)		—	0	22	0	—			2	1	2	0	0	兼15		

教育課程等の概要																
(スポーツ健康科学部スポーツ健康科学科)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
学部共通科目	地域活性演習基礎	2後	2					○		1						
	地域活性演習Ⅰ	3前		2				○				1				
	地域活性演習Ⅱ	3後		2				○		1						
	地域活性演習Ⅲ	4前		2				○		1						
	小計(4科目)	—	2	6	0			—		3	0	1	0	0	兼0	
専門基礎科目	スポーツ科学概論	1前	2					○		2	1	4			オムニバス	
	健康科学概論	1前	2					○		2	1	4			兼1,オムニバス	
	スポーツ哲学	1前		2				○							兼1	
	スポーツ史	1後		2				○							兼1	
	スポーツ指導の基礎	1後		2				○		1						
	スポーツ工学序論	2前	2					○		1						
	野外スポーツ概論	2後		2				○				1				
	スポーツ施設論	3後		2				○		1						
	コンピューティング演習	1後	2						○	2						共同
	測定機器の操作	1前		2					○	1	1					共同
	実験データ処理	2後		2					○	1						
	スポーツ運動学	1後	2						○			1				
生理学A	1後	2						○		1						
生理学B	2後	2						○	1							
スポーツバイオメカニクス講義	2前		2					○				1				
スポーツバイオメカニクス演習	2後		2					○				1				
	小計(16科目)	—	14	18	0			—		6	1	4	0	0	兼2	
専門応用科目	スポーツ統計学	2前		2				○				1				
	測定評価	2後	2					○			1					
	体力測定診断・運動処方	3前	2					○				1				
	スポーツ生体情報処理	3前		2				○		1			1			
	スポーツ生体情報処理演習	3後		2				○		1						
	スポーツ情報処理演習	3前		2				○		1						
	コンピュータプログラミング基礎	3後		2				○		1						
	コンピュータプログラミング応用	4前		2				○		1						
	フィットネス経営論	3前		2				○								兼1
	スポーツ産業論	2前		2				○								兼1
	スポーツマーケティング論	2後		2				○								兼1
	スポーツメディア論	3後		2				○								兼1
	安全管理論	3前		2				○		1						
	企業インターンシップ	3後		2					○	1			1			
	スポーツマネジメント	2後		2					○				1			
	野外スポーツ	3前		1									2			共同
	スポーツと社会	2前	2						○		1					兼1
	地域とスポーツ	2前		2					○							
運動指導論Ⅰ	2後		2					○				1				
運動指導論Ⅱ	3前		2					○	1							
スポーツ心理学	2後		2					○							兼1	
スポーツコーチング論	3前		2					○				1				

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
専門分野科目	発達学	3前		2		○											
	スポーツ医学	3後		2		○											兼1
	栄養学	3前		2		○				1							兼1
	コンディショニング論	3前		2		○											
	健康体力学	3前		2		○				1							
	トレーナー・リハビリテーション演習	4前		2			○				1						
	学校保健	2後		2		○				1							
	救急処	2後		2		○					1						
	衛生学・公衆衛生学	3後		2		○				1							
	ライフスタイルと健康	4前		2		○						1					
	ヘルスプロモーション論	4前		2		○				1							
	体づくり運動	2前	1						○			1					
	体力トレーニング	2前	1						○			1					
	陸上泳	2前		1					○								兼1 共同
	水泳	1前	1						○				1	1			兼1 共同
	ゴール型スポーツA (バスケット)	2後		1					○								兼1
	器械体操	2後		1					○								兼1、集中 兼1、集中
柔道	2後		1					○									
ゴール型スポーツB (サッカー)	3前		1					○				1					
ネット型スポーツA (バドミントン・テニス)	3前		1					○		1							
ベースボール型スポーツ	3前		1					○								兼1	
ラグビー型スポーツ	3後		1					○								兼1	
ネット型スポーツB (バレーボール)	3後		1					○								兼1	
小計(45科目)		—	9	68	0		—			7	1	5	0	0		兼11	
全学共通科目	卒業研究	4通	6					○		7	1	5					
	小計(1科目)	—	6	0	0		—			7	1	5	0	0		兼0	
全学共通科目	教育職論	1前			2	○											兼1
	教育原理	2前			2	○											兼1
	教育心理学	2後			2	○											兼1
	発達心理学	3前			2	○											兼1
	教育社会学	2後			2	○											兼1
	教育課程論	3後			2	○											兼1
	保健体育科教育法I	3通			4	○				2	1	2					オムバス
	保健体育科教育法II	4通			4	○				2		1					オムバス
	特別活動論	3後			2	○											兼1
	教育方法論	2後			2	○											兼1
	道徳教育	2前			2	○											兼1
	生徒・進路指導論	3後			2	○											兼1
	学校教育相談I	2後			2	○											兼1
	学校教育相談II	3前			2	○											兼1
	教育実習I	4前			3				○								集中、兼1
	教育実習II	4前			5				○								集中、兼1
	教職実践演習(中・高)	4後			2				○								兼1
	体育	3後			2				○				1				
小計(18科目)	—	0	0	44		—			2	1	2	0	0		兼3		
合計(145科目)		—	55	184	44		—			7	1	5	0	0		兼42	
学位又は称号	学士(スポーツ健康科学)		学位又は学科の分野			体育関係											
卒業要件及び履修方法						授業期間等											
教養分野科目 人文社会10単位以上、外国語20単位以上、キャリア形成14単位以上、科学基礎4単位以上を含め48単位以上、専門分野 学部共通科目2単位以上、専門基礎科目14単位以上、専門応用科目9単位以上、全学共通科目6単位以上を含め72単位以上を修得し、合計124単位以上を修得すること。 (履修科目の登録の上限:48単位(年間))						1学年の学期区分			2期								
						1学期の授業期間			15週								
						1時限の授業時間			90分								

授 業 科 目 の 概 要				
(スポーツ健康科学部スポーツ健康科学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
教養分野科目	A群	人文社会	哲学入門－人生哲学	人生哲学は、本来、人の善い生(行為)の基準としての善い生(行為)一般を明らかにし、それを基準にしてあらゆる善い生(行為)を明らかにするものである。また、その結果としての根本的な善い生(行為)一般についての考えも人生哲学と言う。この意味での人生哲学は、実は、誰もが既に持っているものである。そして、これがその人の基本的な人生态度となって、その人のあらゆる生き方や行為についての考えや行動を規定する。そこで、この授業は、学生諸君が、様々な人生哲学の学習によって、自らの人生哲学を反省し検討し、よりよい人生哲学を持つようになることを目指す。
			心理学入門－心のはたらき	心理学は、人間の認知・行動を科学的に実証しようと試みる学問として発展してきた。実験や研究から明らかにされた心理学の理論を学習することで、心理学の知見から得られた知識やスキルを日常生活の実践に生かすこと、社会や集団の現象を心理学の理論に基づいて理解・分析することを授業の目的とする。講義形式の授業とワークシート課題を実施することを通して、学生が自らの日常生活において「自分で考え行動すること」「自己を分析すること」が可能となることを目指す。
			女性学入門－女性の生き方論	女性学は世界的な女性解放運動(第2次フェミニズム)の中で生まれた学問領域(歴史、文学、教育、法、経済、政治、社会など)で、「ジェンダー」(社会的・文化的な性)という視点から、私たちがあたり前だと思っている社会がどのように異なってみえるかを提示する学問である。今回の授業では生まれてから死ぬまでに遭遇する身近な出来事の中に潜む「ジェンダー問題」に気づくとともに、男女問わずすべての人にとって生きやすい社会とは何かについて考える。
			コミュニケーション論	現代は社会の変化が大きく複雑化しているため、コミュニケーションをしていく上で様々なつまずきが生じやすい。コミュニケーションには対人的なもの、対物的なもの、さらには自分の内部で行われるものがある。人間のあらゆる活動がコミュニケーションと関係している。それは、これまで、日常生活の中で自然に身に付くものと考えられてきたが、意識的に学ぶことが必要な時代となった。具体的な問題と関連させながら、コミュニケーションとは何か、を考え、また、どうすればコミュニケーションが改善し、生きやすくなるかを考えていきたい。
			人と社会	人間は社会の中に生まれ、社会と関わりつつ自己を形成し、社会を生きる。人間としての自覚を深め、生の尊重を行為の原理として、自己実現を果たしながら生きるあり方を探求する。「社会的職業的自立」への覚醒として①社会的自立(家庭人としての自立、学生としての自立、市民としての自立、職業人としての自立、生涯学習社会の一員としての自立など)を取り扱う。②職業的自立について学生諸君の自覚を促すことを目的として取り扱う。
	B群	人文社会	法学入門－市民社会と法	社会生活を営む上で、私達は、意識するとしないを問わず、法的な関係に立ち入ることになる。日用品を買ったり、交通機関を利用したりする日常生活の活動も常に法的な側面もっている。したがって、社会の中で生きる限り、法に対する正しい知識は、必要不可欠と云っても過言ではない。今後、社会の価値ある一員として生きる基盤形成に資するためにも、成人の教養として必要な法の基礎知識を身に付け、体内にリーガルマインドが醸成されていくための入門編とする。
			日本国憲法	日本国憲法について学習し、権利と責任、使命と義務を自覚する。また、憲法が現実の生活の中でどのように関係しているかを確かめながら自ら考える力を養い、国際社会に生きる日本人としての素養を身につける。
			経済学入門－現代社会と経済	現代はきわめて高度に発達した市場経済に委ねられている。マクロ経済学における経済の構図、基本的な経済原理、景気判断、市場、貨幣などの考え方を理解したうえで、現代社会における、人・物・金の動きを解明し、特に金融・外国為替・貿易・証券等現代社会特有の経済活動に関する知識を習得する。ひいては世界経済の動きを分析し、その中における日本経済の諸問題について自分で考えることができる力を養い、国際人としても活躍できる能力を身につけることを目的としている。

教養分野科目	人文社会	C群	マスコミ論－新聞を読み解く力	多様化するメディア。この科目では新聞、雑誌など活字メディアを中心にマスコミなどメディアの変遷と役割を学ぶ。同時にタイムリーなニュース、話題を取り上げ、新聞を読む力と情報化社会を生きる実践力を身につけていく。学生と意見を交換しながら授業を進め、討論の場、コミュニケーションをはかる場にしていく。	
			日本文化の歴史	建学の精神” 悠久なる日本民族の歴史と伝統とに根ざした愛国心を培い” の精神にそって講義内容を構成する。本講座で取り上げる文化は、建築物や彫刻、絵画、文学などの「文化財・文化遺産」の歴史ではなく、現在の我々の生活や考え方の中に伝えられ生きている文化である。まず、日本人の生活の原点である「稲作」、我々の生活の基盤である「福井県」、活動の舞台である「福井工業大学の創立」について歴史的に学ぶ。また、日本文化の基本にある「中華思想」・「四神思想」・「神祇信仰」（白山信仰）・「晴と曇」・「仏教思想」など、歴史的な事象に基づき明らかにする。それらの学習から、自分の身の周りにある事物や習慣の全てが、歴史的に蓄積されてきた文化であることに気づき、郷土と国土に対する正しい理解と愛情を育てることを目標とする。	
			比較文化論－世界の文化	明治維新後、約140年間で日本は近代化を成し遂げ、経済・文化・科学などの諸分野で世界の中で枢要な地位を占めるまでになった。これを可能にしたのは、日本文化の伝統の力である。日本は中国を中心とする東アジア文化圏の中にありながら文化の独自性を守り、近代合理主義を受容する土台を築き上げていった。それ故に、近代西洋文明と接触するや否やそれを自家薬籠中の物にし、アジアで最も早く近代国家となることが出来ました。従って、ここでは日本文化の独自性と日本人の優れた資質を踏まえ、近代文化の根底をなす合理主義発生の土壌と歴史的展開を西洋の歴史と文化の中で見出そうとするものである。	
			文学入門－小説・詩の世界	近代から現代に至るまでに多くの作家が登場し、それぞれの作品を世に問うてきた。そして、それらの作品は、その時代に生きる人々に大きな夢や希望を与え、生きる指針を示してきた。小説や詩歌など、いわゆる言語芸術（文学作品）は、それが書かれた時代の「人間の在り方、生き方」と強く結びつき、不可分の関係にある。本授業では、そうした作家や作品が持つ時代性と芸術性（文学性）を探ることを中心に学習し、ひいては私たちの生き方、時代との関わり方をも見直し、文学作品の持つ意味を確かめたい。	
	外国語		ベーシックコミュニケーションⅠ	グローバル化が進む現代社会においては、大都市だけではなく地方都市においても外国人と接する機会は今後増えるであろう。この授業では自己紹介・出会い・家族・日常の行動・衣類・買い物など身近な題材をもとに日常英会話に必要な基本的な語彙・表現方法を学ぶ。日常生活を軸に身近な英語表現に慣れ親しむことで、初めは単語レベルでも構わないので、間違いを犯すことを恐れることなく、臆せずに積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	
			ベーシックコミュニケーションⅡ	ベーシックコミュニケーションⅠに引き続き、趣味・食事・スポーツ・家・過去の行動・目標と夢など身近な題材をもとに基本的な語彙・表現方法を学ぶ。ペアワークやグループワークなどの言語活動を通して、聴く力・話す力・考える力を身につける。また外国人講師とのディスカッションを通して英語を道具として自分の考えや意見を他者に伝える能力を養うことにより、社会の一員として他者との関わりを円滑に進めるためのコミュニケーション能力の向上を図る。	
			アドバンスコミュニケーションⅠ	現代のグローバル化社会においては外国はもはや遠い存在ではない。とりわけ海外旅行を通じて、異文化に触れる機会を得ることは高いハードルではない。この授業ではイギリス、ニュージーランド、タイ、アイルランドへ出向く日本人とアメリカ人の旅行記を通じて、旅先での様々な場面における英会話表現を学ぶ。言葉に不自由することなく、海外旅行を楽しめる英語力を習得し、さらに英語を通じて外国の事情や異文化について興味・関心を持つとともにそれらに対する理解を深めることを目的とする。	
			アドバンスコミュニケーションⅡ	観光を目的とした数日間の海外旅行だけではなく、在学中に海外語学研修に参加したり、卒業後に長期の海外留学を経験することにより、英語コミュニケーション能力を向上させることに加えて、より視野の広い国際感覚を身につけることが可能となる。この授業では海外に滞在・留学する際に必要な会話表現を学ぶことにより、ひいては外国の人々の暮らし、文化や世界の出来事にも目を向け、国際的な視野の拡大を図り、多様な考え方を持つ人と交わろうとする態度を養う。	
			テクニカルコミュニケーションⅠ	ベーシックコミュニケーションⅠ・Ⅱ及びアドバンスコミュニケーションⅠ・Ⅱで学んだ一般的な英語コミュニケーション能力を基盤として、科学技術英語に関する初歩的な知識の習得とその知識を背景としたより専門的な英語コミュニケーション能力の養成を目的とする。具体的な内容としては、機器に関する問題の特定、調査及び説明の仕方を学ぶことと、職場で一般的に見られる英語の標識を理解するとともに、材料、道具、機器等を英語で表現できるようにすることである。	

<p>テクニカルコミュニケーションⅡ</p>	<p>工学・科学技術等の専門分野における英語コミュニケーション能力を高めるための必要不可欠な要素の一つが一般的な英会話では学ぶことのない専門用語を習得することである。この授業では科学技術英語に関する基本的な知識と専門用語の習得を目指し、工学・科学技術分野における英語コミュニケーション能力の養成を目的とする。具体的な内容としては、機器の使用方法や機能について英語で説明する表現を学び、また基本的な計算や数値、統計などに関する表現方法を学習する。</p>	
<p>テクニカルコミュニケーションⅢ</p>	<p>日本国内の中小企業であっても開発した製品や技術を海外に輸出するなど、海外企業との関わりを切り離して考えることはできない。取引相手がタイやベトナム、インドネシアなど東南アジアの新興国の企業であったとしても、共通の言語となるのは英語である。この授業では海外企業との取引を念頭に科学技術英語に関する応用知識の習得と専門知識を基盤とした英語コミュニケーション能力の養成を目的とする。具体的な内容としては、機器の操作や修理方法、使用説明書などを英語で説明する能力を養う。</p>	
<p>テクニカルコミュニケーションⅣ</p>	<p>日本国内の中小企業であっても東アジア・東南アジアなどを中心に海外企業と提携を結んだり海外に支社を設立している企業は少なくない。このような状況下では技術者であっても海外に赴任して仕事をする機会はあるといえる。この授業では科学技術英語に関する発展的知識を習得することにより英語コミュニケーション能力を兼ね備えた国際的に活躍できる中堅技術者の養成を目的とする。具体的な内容としては、ロジスティックスやリサイクルの手順に関して技術面を中心に議論する。</p>	
<p>ビジネスコミュニケーションⅠ</p>	<p>ベーシックコミュニケーションⅠ・Ⅱ及びアドバンストコミュニケーションⅠ・Ⅱで学んだ一般的な英語コミュニケーション能力を基盤として、ビジネス分野における基本的な英語コミュニケーション能力の養成を目的とする。具体的な内容としては、海外出張、国際的な展示会への参加、アポイントメントの取り方など、具体的なビジネスシーンを想定した教材を用い、ビデオ教材やロールプレイも取り入れて、基本的語彙や口語表現の修得を目指す。</p>	
<p>ビジネスコミュニケーションⅡ</p>	<p>ビジネスの現場で円滑に英語でコミュニケーションが取れるようになるためには、ビジネス分野で必須の語彙の習得が不可欠となる。この授業ではビジネス・コミュニケーションⅠに引き続き、国際的なビジネスの場が必要とされる英語コミュニケーション能力を養成する。具体的な内容としては、実際のビジネスシーンを想定した教材を用い、ビデオ教材やロールプレイも取り入れて、ビジネス分野に関する基本的語彙や口語表現の修得を目指す。</p>	
<p>ビジネスコミュニケーションⅢ</p>	<p>日本国内の中小企業でも海外企業との取引を行っている企業は非常に多く、企業の貿易部門などでは英語を始め外国語の運用能力を備えた人材が不可欠である。この授業ではビジネスコミュニケーションⅡに引き続き、国際的なビジネスの場におけるより円滑な英語でのコミュニケーション能力の養成を目指す。具体的には、会社の紹介、取引先への訪問、商品の発注など、具体的なビジネスシーンを想定したテキストを用い、ビデオ教材やロールプレイも取り入れて、基本的語彙や口語表現の習得を目指す。</p>	
<p>ビジネスコミュニケーションⅣ</p>	<p>日本国内の中小企業であっても東アジア・東南アジアなどを中心に海外企業と提携を結んだり海外に支社を設立している企業は少なくない。このような状況下では技術者であっても海外に赴任して仕事をする機会はあるといえる。この授業では科学技術英語に関する発展的知識を習得することにより英語コミュニケーション能力を兼ね備えた国際的に活躍できる中堅技術者の養成を目的とする。具体的な内容としては、ロジスティックスやリサイクルの手順に関してビジネスシーンを想定し議論する。</p>	
<p>リスニングⅠ</p>	<p>オーラルコミュニケーションに必要な能力は言うまでもなくスピーキングとリスニングの能力である。この授業では人の名前や日付、物と物との位置関係を表す場所表現など英語圏で生活をする際に必要な基本的表現のリスニング能力を養成する。単語レベルのディクテーションによりリスニング能力の定着度の確認を行う。また英語の強弱アクセント及びイントネーションに慣れるために、ペアワークによる発音練習を多く取り入れ、担当教員による発音指導を行う。</p>	
<p>リスニングⅡ</p>	<p>リスニングⅠに引き続き、毎回の授業でできるだけたくさんの英語を聞き取り、「英語耳」を作ることを目的とする。具体的には、買い物をする際に必要な金額の聞き取りや商品説明、道案内など、より発展的な内容のリスニング能力を養成する。フレーズレベルのディクテーションによりリスニング能力の定着度の確認を行う。またペアワークによる会話文の発音練習を多く取り入れ、ナチュラルスピードの会話に現れる英語特有の音に慣れることを目指す。</p>	

教養分野科目

外国語

T O E I C I	日本の大学及び企業において学生や社員の英語コミュニケーション能力を測定するための英語資格試験としてTOEICが定着していることは否定できない。しかしながら、高等学校までは英語の資格試験としては依然として英検が主流となっているため、大学生の多くはTOEICの試験形式に慣れていない。この授業ではまずTOEICの試験形式を理解し、演習問題を解くことによりPart1～Part7までの各パートの出題形式に慣れることを目的とする。	
T O E I C II	TOEIC試験はPart1～Part4までのリスニングセクションとPart5～Part7までのリーディングセクションに分かれているが、各パートともに出題される問題の難易度は前半部分が比較的易しく、後半になるにつれ次第に難易度が上がる。この授業ではTOEICのスコアを着実にアップさせることを目的とし、各パートの前半に出題される比較的難易度の易しい問題を確実に解けるようになるように、基本問題の演習を繰り返し行う。	
T O E I C III	TOEICの試験形式に慣れ、各パート毎に難易度の易しい問題を確実に解ける力が付けば、さらなるスコアアップを目指すこととなる。その秘訣は繰り返し演習問題を解くことに加えて、各パートの難易度の高い問題を攻略するために出題のパターンを理解し、出題パターンに応じた解法を会得することである。特にリスニングセクションの各パートでは解法のポイントを押さえておくことは、飛躍的なスコアアップにつながる。この授業では出題パターンを瞬時に分析し、正確に解答できる力を身につける。	
T O E I C IV	基礎的な英語力が備わり、毎回ある程度着実に一定レベルのTOEICのスコアを獲得できるようになった学生でも、100問あるリーディング問題を75分間で完問することは非常に難しい。この授業では時間の有効な使い方をマスターすることで、リスニングセクションの各パートの後半に出題される比較的難易度の高い問題も解ける力を養成する。またリーディングセクションにおいても問題を解く順序や時間配分をマスターし、75分で100問を解く力を身につける。	
海 外 語 学 研 修 I	教室の中で習得した英語コミュニケーション能力を英語圏の国で生活することによりさらに向上させることができる。たとえ短期間であっても、実際に海外で生活することによって、初めて経験し、理解できることは非常にたくさんある。この授業では夏休み期間中に海外提携大学における語学研修及びホームステイによる異文化体験等を通じて、授業でトレーニングした英語力のさらなるスキルアップを図るとともに、自国と他国との違いを理解し、国際的な視野で物事を捉える事ができる思考を養う。(研修実施時期により、I～IVとして単位化するものとする。)	集中
海 外 語 学 研 修 II	教室の中で習得した英語コミュニケーション能力を英語圏の国で生活することによりさらに向上させることができる。たとえ短期間であっても、実際に海外で生活することによって、初めて経験し、理解できることは非常にたくさんある。この授業では夏休み期間中に海外提携大学における語学研修及びホームステイによる異文化体験等を通じて、授業でトレーニングした英語力のさらなるスキルアップを図るとともに、自国と他国との違いを理解し、国際的な視野で物事を捉える事ができる思考を養う。(研修実施時期により、I～IVとして単位化するものとする。)	集中
海 外 語 学 研 修 III	教室の中で習得した英語コミュニケーション能力を英語圏の国で生活することによりさらに向上させることができる。たとえ短期間であっても、実際に海外で生活することによって、初めて経験し、理解できることは非常にたくさんある。この授業では夏休み期間中に海外提携大学における語学研修及びホームステイによる異文化体験等を通じて、授業でトレーニングした英語力のさらなるスキルアップを図るとともに、自国と他国との違いを理解し、国際的な視野で物事を捉える事ができる思考を養う。(研修実施時期により、I～IVとして単位化するものとする。)	集中
海 外 語 学 研 修 IV	教室の中で習得した英語コミュニケーション能力を英語圏の国で生活することによりさらに向上させることができる。たとえ短期間であっても、実際に海外で生活することによって、初めて経験し、理解できることは非常にたくさんある。この授業では夏休み期間中に海外提携大学における語学研修及びホームステイによる異文化体験等を通じて、授業でトレーニングした英語力のさらなるスキルアップを図るとともに、自国と他国との違いを理解し、国際的な視野で物事を捉える事ができる思考を養う。(研修実施時期により、I～IVとして単位化するものとする。)	集中
日 本 語 の 基 礎	日本語の能力は、単に情報収集や情報発信のために必要であるだけでなく、あらゆる科学を学ぶ者にとって思考力の基盤をなす意味においてもきわめて重要である。本科目は日本語の基礎学力が不十分な新入生を対象とし、基本的語彙の確認からはじめ、文章を正確に読解する方法と誤解のない文章の表現方法の基礎を演習形式で指導する。日本語を母国語としない留学生に対しても、本科目の受講を推奨する。	

教養分野科目	キャリア形成	日本語表現法Ⅰ	日本語の能力は、単に情報収集や情報発信のために必要であるだけでなく、あらゆる科学を学ぶ者にとって思考力の基盤をなす意味においてもきわめて重要である。本科目は、平易な論説文を正確に読解する方法と論理的な文章の表現方法の基礎を演習形式で指導する。また、社会人として必要な敬語の基礎についても指導する。	
		日本語表現法Ⅱ	「日本語表現法Ⅰ」を受講した学生を対象に、やや高度な論説文を正確に読解する方法と、読解した内容を元に自らの思考を加え論理的な文章として表現する方法を演習形式で指導する。Ⅰとの違いは、扱う文章の専門性や論理性が高度になることにとどまらず、論理的な文章を読み書きすることを通して思考力を養うことにある。全15回。	
		キャリアデザインⅠ	学生が、職業人生を考えるためのプラットフォームを提供し、職業観を養成することの手助けを行う科目である。社会と経済の仕組み、産業構造の変化、日本の雇用環境の特質などを理解し、仕事の意義、職場の種類、職業人生の組み立て方法などの概要を指導する。単なる知識の一方的な伝達にならないよう、講義と演習を組み合わせて理解を促す。講義の最後には各自の人生設計のロードマップ（キャリアシート）のラフスケッチを描けることを目標とする。	共同
		キャリアデザインⅡ	学生が各自の専門性を生かしながら、実際に自分に合った職業を選択するために必要な知識と技術を指導する。身近な社会人の観察や聞き取り調査など、単なる知識の一方的な伝達にならないよう、講義と演習を組み合わせて理解を促す。講義の最後に、キャリアデザインⅠで作成した人生設計のためのキャリアシートをより現実的なものに修正することを目標とする。	共同
		キャリアゼミⅠ	キャリアゼミはキャリア教育の一環として、社会人基礎力の涵養を目的とし、教養科目および専門科目を有機的に融合するように、1年次と3年次に継続的に配置した少人数制によるゼミ形式の演習科目である。本科目はその第1段階として入学直後の新入生を対象に、大学で学ぶことの意味と学び方、意義深い大学時代を過ごすための生活の仕方などを、教員や他の受講生との自由なディスカッションを通じて考えるための科目である。同時に、会話によるコミュニケーションの基本を身につけることを目的とする。	
		キャリアゼミⅡ	キャリアゼミの第2段階として、前期での大学生活を顧みて学習の習熟度を自ら判断させ、それを一層向上させるために教員との対話・討論を通して、自主的な学習の重要性を理解させる。また、所属学部・学科の専門性に添った学習方法について理解させる。さらに、学習の成果を他者に伝えることを通じて、コミュニケーションを図る上での感性の大切さや、社会生活におけるマナーを理解させ、大学生としての教養と人格の育成を図る。	
		キャリアゼミⅢ	キャリアゼミの第3段階として、専門分野に関する対話や演習を行うことにより、専門性に対する理解度を向上させ、各自のキャリアの方向性を考える指針を与えることを目的とする。3年生前期はその後の就職活動の準備をする上できわめて重要な時期であり、教員および他の学生との活発な討論を通して、それぞれの所属学科に関連した業界および職種について理解を深め、各自の価値観の育成を図ると同時に、各自が目ざす職業へ向けて具体的な準備の方法を指導する。	
		キャリアゼミⅣ	キャリアゼミの最終段階として、専門科目の内容を具体的な職業と関連づけて理解し、各自の専門性を通して社会に貢献する方法を考えさせる。これにより、学生の社会への参加意識を育て、各自の将来設計に向かって行動するための意欲を育成する。また、就職活動を具体的に進めるために必要な知識やスキルを指導する。	
		インターシップA	企業や行政機関など社会の中で学習の成果を試し、同時に労働の実践について体験的に学ぶ研修、いわゆるインターシップを希望する学生のための演習科目である。仕事に臨む心構えや社会人としてのマナーなどを事前に指導し、レポート課題に合格した学生を対象に大学が研修先を紹介する。研修を通して実社会に対する見聞を広め、各自の進路選択に役立てることが目的である。	

教養分野科目	キャリア形成	インターンシップ B	インターンシップを希望する学生のための演習科目である。「インターンシップA」との違いは、学生各自の専門性や学科の事情に添って研修を行う点にある。仕事に臨む心構えや社会人としてのマナーなどを事前に指導することは同様であるが、より専門性に基づいた指導が行われる。研修先は大学が紹介する場合と、教員の指導の下で学生自らが受け入れ企業に直接コンタクトをとる場合とがある。研修を通して実社会に対する見聞を広め、各自の進路選択に役立てることが目的である。	
		地域共生学	地域社会で顕著な活躍をされている方々をゲストに迎え、さらに地域貢献において特徴ある活動を行っている本学教員も講師に立つ。それぞれの立場および活動事例を通して、地域の産業・経済、企業や工業技術、地域文化などについて学ぶとともに、地域社会との関わり方、海外と地域との関係、あるいは社会人として必要な教養や責任感、倫理観、職業観、常識とはどのようなものかを考え、理解を深める。	
		テクニカルライティング	自然科学の基礎知識から、具体的課題を受講生各人が自ら選定し、自ら解を見つけ出すべく自己学習を行い、その結果をレポートとしてまとめ上げることは、大学教育の基本的な要素であり、同時に重要なキャリア形成教育の一環でもある。本授業は、その準備教育として科学/技術レポートの書き方の基本を学生が身につけることを目的としている。そのために、授業はレポート作成練習を中心とした演習形式の授業とし、レポート作成のルールと基本スキルを短期間に修得するための科目である。	
		プレゼンテーション	科学者は、自ら選定したもしくは他から与えられた解決すべき課題について、学習と研究により解決策を探求し、結果をレポートとしてまとめ上げるだけでは不十分であり、その内容について他者に正確に説明できる能力も必須である。本授業は、学生がこの説明能力とプレゼンテーション力の基本を身につけることを目的としている。そのために、授業はプレゼンテーション練習を中心とした演習形式の授業とし、プレゼンテーションの基本スキルを短期間に修得するための科目である。	
		課題研究	科学/技術レポートとしてまとめ上げるための基本スキルの修得授業であったテクニカルライティング、また、他者へ正確に説明するための基本的スキルの習得授業であったプレゼンテーションを受講した後、これら基本スキルの実践の場として受講生自らが選定した具体的課題を対象に、受講生自らがより深く課題に取り組み、創造力の育成を目的とした課題研究を行う授業である。そのために、授業は自由研究方式とし、最後に実施内容・結果についてまとめ、報告書として提出し、プレゼンテーションにより評価を受ける演習科目である。	
教養分野科目	キャリア形成	コンピュータリテラシ	高度情報化社会においては、あらゆる場面で情報技術を利用する機会がある。一方で、情報技術は社会に多大な影響を与え、その利用に関する課題が露呈している。この科目では、コンピュータやネットワークの仕組みを理解し、ソフトウェア利用技術を習得すると共に、情報技術が社会に与える影響について検討することで、高度情報化社会で求められる、情報の利活用に関する倫理観の養成を目的としている。授業においては、紙媒体の補助教材に加え、マルチメディア教材を併用し、情報技術やその周辺に関する話題を身近なものにするよう工夫する。	
		基礎数学 A	高校数学の「数学Ⅰ」から「数学Ⅱ」までの内容を中心に扱う。この科目では、講義形式並びに演習形式を併用し、大学における専門科目を理解するための基礎の習得及び学習意欲の向上を目的としている。具体的な内容は、文字式の計算、式の展開・因数分解、分式及び無理式の計算、剰余定理・因数定理、1次方程式・2次方程式、図形と方程式、1次関数と2次関数、無理関数、分数関数、三角比、正弦定理・余弦定理、三角関数、加法定理、指数法則、指数関数・対数関数である。	
		基礎数学 B	高校数学「数学Ⅰ」から「数学Ⅱ」までの内容を中心に扱う。この科目では、講義形式並びに演習形式を併用し、大学における専門科目を理解するための基礎の習得及び学習意欲の向上を目的としている。具体的な内容は、1次関数と2次関数、無理関数、分数関数、正弦定理・余弦定理、三角関数、加法定理、指数法則、指数関数・対数関数である。特に、「微分積分学Ⅰ」への接続を踏まえ、関数の概念及びグラフの作成等、関数の形状を表現することに重点を置く。	
		基礎数学 A B	高校数学の「数学Ⅰ」から「数学Ⅱ」までの内容を中心に扱う。この科目は、「数学基礎A」の内容に対する理解が十分である受講生、及び、「数学基礎B」において学習進度に遅れが生じた受講生を対象に、両科目を補完する内容と位置付けている。具体的な内容としては、2次関数、無理関数、分数関数、正弦定理・余弦定理、三角関数、加法定理、指数法則、指数関数・対数関数である。可能な限り少人数のクラスを編成し、講義形式並びに演習形式を併用する一方で、より多くの問題に取り組む。	
	科学			



<p>社 会 調 査 論</p>	<p>社会における人々の意識や行動の実態を把握するために、インタビューやアンケート等による調査が頻繁に行われている。この科目では、社会調査の意義と共に、様々な調査の方法を習得することを目的としている。具体的な内容としては、社会調査の定義、統計的調査の方法、標本抽出の方法、社会調査の実例、社会調査の問題点を対象とする。社会調査は、理系・文系を問わず、様々な分野・場面において用いられていることから幅広く応用が可能であり、各学科の専門に応じたテーマを取り上げたり、コンピュータを用いて調査結果を集計したりする等、実践を見据えた社会調査の演習を行う。</p>	
<p>環 境 ・ 情 報 倫 理</p>	<p>近年、環境保存型社会への移行を狙いとして、生活様式や企業活動の形態を改める規範「環境倫理」が示されている。一方で、情報化社会における情報の扱い方に関しても、同様の規範「情報倫理」が存在している。持続可能な社会の実現に向けては、これらの倫理意識を高めることが強く要請されている。この科目では、持続可能な社会の形成に求められる2つの倫理観について学び、これらの倫理観の向上を目指す。実施にあたっては、倫理観が問われる事例を提示し、倫理観の欠如が身近な状況で起こり得ることを説明する他、より良い社会を形成するための議論を展開する。</p>	

授 業 科 目 の 概 要			
(スポーツ健康科学部スポーツ健康科学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門分野科目	学部共通科目		
	地域活性化演習基礎	PBL (Project Based Learning) は、学生が主体的にプロジェクトを遂行し、その経験から気づきや学びを得る教育手法のことである。この科目では、初めてPBLに取り組む学生を対象にPBLの演習の進め方、つまりPDCA (PLAN、DO、CHECK、ACT) サイクルの仕組みについて解説した後、地域のスポーツや健康にかかわる課題（初年度は地域高齢者の健康維持向上）を例に取り上げ、その課題解決を目標に数名のチームでプロジェクトの立案から実行までをシミュレーションし、PBL型教育の基本を理解する。さらに、プレゼンテーション能力向上のため、得られた成果を発表会において発表する。これらの課程を経ることで、以降実施される地域活性化演習Ⅰ～Ⅲで本格的なPBLに取り組むための基礎力を身に付けることを目標としている。	
	地域活性化演習Ⅰ	この科目では、地域活性化演習基礎で得た知識を基に、自ら選択したスポーツもしくは健康をキーワードとする地域活性化に関連する課題の解決を目指し、数名のチームでプロジェクトを遂行する。これらの過程を通して、プロジェクトの基礎知識（プロセスや問題解決手法）、プロジェクトの遂行に必要な行動・思考特性（特にチームワークやステークホルダーと合意しながらの作業）を修得する。さらに、第三者でも分かりやすい報告書の書き方およびプレゼンテーション能力を身につける。	
	地域活性化演習Ⅱ	この科目では、教員がRFP (Request For Proposal) を提示した中から学生が案件を選び、学生自身の手でプロジェクトを実施していく。これにより地域活性化演習Ⅰで学んだことを「知っている」レベルから「実行できる」レベルにステップアップさせる。さらに、プロジェクト終了後にPBL遂行中に発生した問題やそれらへの対策、およびその効果について事後分析を行い、学科もしくは学部の関係者に向けて発表する。	
	地域活性化演習Ⅲ	この科目では、地域活性化演習Ⅱで取り組んだプロジェクトを継続し、遂行過程で発生する様々な問題・課題を深く掘り下げながら、プロジェクト完了に向けてチームによるプロジェクト運営を行う。これにより、これまでのプロジェクト遂行において自ら不足を感じた個人レベルの技術やヒューマンスキル、コミュニケーション能力の向上を目指すとともに、課題解決のための調査力および洞察力を高める。	
専門分野科目	専門基礎科目	スポーツ科学は、運動学や生理学といった身体に直接かかわる学問領域から、社会学やマネジメント（経営学）といった身体運動と直接関与しない領域まで、幅広い分野にまたがる複合領域である。本講義では、スポーツ科学が扱う研究領域について、それぞれの専門分野の教員から説明を行い、今後、スポーツ科学を学習するうえで必要となる基礎知識の習得を目指す。更に、現在の日本におけるスポーツ振興の政策や、海外との比較、多様化するスポーツのニーズについても学習し、今後のスポーツ科学のあり方についての基本的な知識を身に付ける。	オムニバス方式
	スポーツ科学概論	(オムニバス方式/全15回) (① 横谷 智久/2回) 8 スポーツと地域社会、15 試験の解説 (③ 吉村 喜信/2回) 5 トレーニング理論、6 スポーツと工学 (⑤ 野口 雄慶/3回) 1 スポーツ科学とは？、14 スポーツと安全管理、7 スポーツと心理 (9 野尻 (藤本) 奈央子/2回) 12 海外のスポーツ事情 (2)、13 多様化するスポーツ (⑥ 杉浦 宏季/2回) 2 体力と発育発達、3 スポーツと生理学 (11 栗本 宣和/3回) 9 スポーツマネージメント、10 スポーツとコーチング、 11 海外のスポーツ事情 (1) (12 辻本 典央/1回) 4 運動に関する力学の基礎	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門分野科目	専門基礎科目	健康科学概論	<p>科学・医療技術や経済社会の発展と共に、心身の健康の維持・増進、生涯にわたる学習、高齢者の生活など、人間生活をめぐる様々な領域に新しい課題が生じてきている。本講義では、現代社会が抱える健康問題について解説し、それらの問題点に対応するために行われている施策や、その具体的な方法（健康状態の評価、健康管理のための栄養管理・運動指導、ストレス対処法）などの概略について学習し、以後の健康関連の各論を学ぶ上で必要となる知識を身に付けることを目的としている。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(① 横谷 智久/3回) 2 健康の概念、3 今日の健康問題、4 ヘルスプロモーション</p> <p>(③ 吉村 喜信/1回) 12 健康と運動</p> <p>(⑤ 野口 雄慶/2回) 9 健康と体組成、食事・栄養、14 応急処置の基本</p> <p>(9 野尻 (藤本) 奈央子/1回) 10 健康と生活環境</p> <p>(⑥ 杉浦 宏季/3回) 1 健康科学とは？、13 健康と発育発達・老化、15 試験の解説</p> <p>(11 栗本 宣和/1回) 8 生涯スポーツの楽しみ方</p> <p>(12 辻本 典央/3回) 5 メディカルチェック、6 健康と体力、7 健康とライフサイクル</p> <p>(27 荒木 史代/1回) 11 健康とストレス</p>	オムニバス方式
		スポーツ哲学	<p>スポーツ科学の基礎論であるスポーツ哲学は、スポーツの本質について考える分野である。過去から現代まで変化を遂げてきたスポーツ分野の類型や特性、あるいはスポーツの本質特性など、スポーツとは何かであるかを考える上で必要な原理・原則について知識を深め、スポーツそのものが持つ価値や社会において果たすことのできる役割等について講義で紹介する。スポーツの倫理、魅力、文化価値など、今後スポーツに携わる者にとって重要となるテーマに加え、ジェンダーや近年問題となったスポーツ活動中の体罰・暴力・いじめ問題などのテーマも取扱い、スポーツ哲学の基礎知識、指導者としての哲学を身に付けることを目標とする。</p>	
		スポーツ史	<p>スポーツの語彙史から始まり、古代から中世、近代を経て現代に至るまで、スポーツ、あるいは体育は、時代の流れや歴史の動きと合わせて社会の中で、どのような変遷を遂げてきたか、現代のスポーツの持つ文化価値がどのように構築されてきたか、あるいは、スポーツが持っている陰（負）の側面を理解することで、スポーツに対する幅広い認識を持ち、スポーツ科学に必要な基礎知識を身に付けることを目標とする。</p>	
		スポーツ指導の基礎	<p>スポーツ指導の基本は、スポーツ医・科学の知識を生かし、スポーツの本質的な楽しさ、素晴らしさを伝えることである。つまり指導者は、日常生活にスポーツを取り入れることによって「豊かな人生」を広く一般に定着させるために、必要とされる基本的な内容を学び、指導者としての成長、発展を目指していくことが求められる。そこで本講義ではスポーツ指導者の役割とは、どういうことであるかを学習する。</p>	
		スポーツ工学序論	<p>工学技術がめざましく進んでいる中で、スポーツにおいても従来の経験的指導法や、繰り返すだけの練習法から、バイオメカニクスを理解し、運動自体を客観的に捉える必要があると近年見直されてきている。身体の動きは本人自身が自覚している動作と客観的に見る動作とは相違点が見られるのが通常である、そのギャップが練習課題や、トレーニング課題になるが、その違いを明確に把握することでイメージや努力目標が明確になる。</p> <p>そのことから、本授業では工学機器を利用し動作や生理学的な測定法を学び客観的動作の捉え方を学び、実際のスポーツ現場で有効活用できるように工学の活用技術を習得することを目的とする。</p>	
		野外スポーツ概論	<p>近年、少子化や地域における集団遊びの減少を背景に、コミュニケーション能力の低下、対人関係を構築する能力が弱くなってきている。野外活動はそうした子ども達の「生きる力」の育成に役立つとされている。しかし、野外活動は適切な指導がなされないと事故になる危険性がある。指導者として体験活動に携わる場合は安全に指導できる能力を有することが望ましい。野外活動を実施する知識、技術を学び、実際に体験する中でその魅力や効果を感じられるよう展開していく。そして、野外活動を安全に行える基礎的な資質と能力の獲得を目指す。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門分野科目	専門基礎科目	スポーツ施設論	本講義では、スポーツ施設の基本的事項について確実に理解が深まることを目標とする。最初に、各種屋外体育施設の設計施工の共通事項として、土工計画、基礎、排水設備、給水設備、照明施設についての留意点を説明した後に、具体的事例として、運動公園、陸上競技場、野球場、テニスコートなどを中心に、配慮すべき要点について説明するとともに、維持管理の重要性についても言及する。さらに、屋内体育施設の設計施工に際しての重要な要点について体育館や屋内プール施設などを中心に解説したうえで、スポーツフロアのメンテナンスや、スポーツ照明の保守管理についても講述する。	
		コンピューティング演習	将来、スポーツ産業従事者あるいはスポーツ指導者になるためには、データの収集・分析・図表作成能力、プレゼンテーション能力、情報発信能力が要求される。本授業では、近年の情報・通信・メディア技術の多様化に対応できる効果的なコンピュータ活用法を学習し、以後に行われるスポーツ情報処理演習や卒業研究に必要な技術の習得を目的とする。	共同
		測定機器の操作	スポーツや健康に関わる体力、身体組成、身体活動のデータを正確に測定するためには、各種の測定機器を活用して信頼性、妥当性の高い測定結果を得る必要がある。そのためには、測定機器の正しい操作手順を理解することはもちろん、測定の原理や、測定器が原因となる固有誤差、系統誤差、あるいは測定器を扱う方の誤りによって生じる偶然誤差の概念を理解し、正確な測定値を得るための専門的な知識が必要となる。本講義では、スポーツや健康科学の分野で用いられる代表的な測定機器を題材にし、その操作を通して、誤差や信頼性の概念の理解、正しい測定を行うための注意点を、演習形式で学生に理解させることを目的としている。	共同
		実験データ処理	レポートを書くときは実験結果などのデータを適切に処理し、分かり易い形にまとめておく必要がある。本講義では、マイクロソフト社のエクセルを用いて、主に表計算ソフトによるデータ処理の手法を身につけることを目的とする。エクセルの操作方法、大学での実験において必要となるスポーツや生体関連の様々な数値データの加工・分析などについて例題を通して学ぶことにより、その機能を十分理解し、応用的な使い方を修得する。	
		スポーツ運動学	「ヒトの動き」および「運動の構造」の成り立ちを理解し、運動および動きの評価の基礎を学習することによって、スポーツ指導の実践・指導へ応用することを学ぶ。具体的には、身体運動を構成する要素について概説し、身体構造と発達、身体構造と機能、動きのとらえ方（主観と客観）について講義を行う。また、講義の後半では、本講義で得た知識を、実際のスポーツ指導の現場で扱うための運動方法学についても学習し、実践で役立つ知識の習得を目指す。	
		生理学 A	運動を行うことにより様々な生理的変化が生体内で起こる。このような変化がどのようなメカニズムで起こるのか、また、生体にはどのような器官あるいは機能が備わっているのかを理解することは、身体スポーツ関連科目を学ぶ上で重要となる。加えて、健康増進に関する知識を養う上でも、身体の構造や機能について理解する必要がある。本授業では、筋機能、骨機能、呼吸循環機能、神経機能、感覚機能などの身体機能構造や基本的な働きについて理解することを目的とする。	
		生理学 B	生理学概論、運動生理学概論、運動生化学概論をはじめ、細胞のエネルギー源（糖新生・解糖系・TCA回路・電子伝達系・β酸化など）、エネルギー代謝、基礎代謝、及び、呼吸循環機能、体脂肪・血清脂質、糖代謝、鉄・赤血球、体温調節、活性酸素、消化機能、腎機能、脳機能、内分泌などと運動との関わりについて生理学的に幅広く解説する。さらに、中高年における健康づくりの運動による生理学的な身体反応についても、論述する。	
		スポーツバイオメカニクス講義	スポーツ中の動きや、動きが生み出される力学的なメカニズムについて学ぶことにより、よりよい技術やスポーツ中の障害への理解を深め、理論的なスポーツ指導に生かすことを目的とする。走る、跳ぶ、投げるといった基本的なスポーツ動作から、具体的な競技種目における動作までを対象にし、これまでの研究で明らかになっている動きのメカニズムについて講じる。また、スポーツ動作の分析を指導現場で活用している実践例なども紹介する。	
専門基礎科目	スポーツバイオメカニクス演習	スポーツにおける動きを客観的なデータとして捉えるためには、測定機器を駆使することが必要である。データは実験室の中でしか収集できないものから、指導現場で簡易的に収集できるものまで様々であり、目的に応じて使用する機器や方法を適切に選択する必要がある。いくつかのシチュエーションにおける演習を通し、実際に動きや力のデータを収集するための実験機器のセッティングや、データ取得方法およびデータ分析方法までを学ぶ。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門分野科目 専門応用科目	スポーツ統計学	健康・スポーツ科学の研究において、適切な研究計画を立案し、収集したデータを活用する上で、統計学の知識および技能は必要不可欠である。本授業では、講義を通して学術論文などで頻りに用いられている確率や差の検定、相関分析といった代表的な統計学的手法を習得する。加えて、Excelを用いた実践を通して、平均値や標準偏差といった基礎統計値の算出、仮説を検証するための統計処理、得られた結果の図表での示し方なども習得する。	
	測定評価	健康教育や競技スポーツの実現場では、現在の状態や起こっている現象を数値の世界に置き換え、体力的視点から科学的に観察し、適切に評価することが必要不可欠ある。本授業では、測定評価の基礎知識（信頼性、妥当性、尺度の水準、測定誤差）を身に付けるとともに、既成のラボラトリーテストおよびフィールドテストを正確に実施し、得られた結果を基準値あるいは他者と比較して的確に評価できる能力を身につけることを目標とする。	
	体力測定診断・運動処方	生活習慣病に対する一次予防の重要性が指摘される中で、自らが正しい知識に基づく処方論を身につけることは重要である。本授業では、体力を評価する必要性、正しい体力測定方法、各年代の体力の基準値などを理解し、情報を正確に評価できるようになるための測定と評価の技法などの基礎を、講義と実践により習得する。加えて、処方論の基礎知識から処方計画を作成する実践スキルを養うとともに、運動の必要性をエビデンスに基づき正しく理解する。	
	スポーツ生体情報処理	本講義では、運動時の筋電位、角膜網膜電位および視覚誘発電位などの生体電気信号を抽出するための計測システム、測定波形に対してコンピュータ処理や解析を行う方法などについて説明する。そして、複雑な生体情報処理と制御のメカニズムについて修得することを目的とする。	
	スポーツ生体情報処理演習	多用途生体アンプを使用して筋電図・心電図・誘発脳波などの生体電気信号の測定手順や、対象とする生体電気信号に応じた効率の良いデータ収録・処理方法について学び、身体運動と生体電気信号との関連性についての理解を深める。また、近赤外光を用いた前額部専用の光トポグラフィ装置を使い、外部ノイズの影響が少なく、より日常に近い環境での脳活動の計測や、身体運動・コミュニケーション時における脳機能計測への応用などを行うことにより、一連の情報処理機構について学ぶ。	
	スポーツ情報処理演習	表計算ソフトウェアExcelを用いて、スポーツに関連する統計処理を主体に学習する。測定や調査の対象となるすべての個体の集まりを母集団という。母集団から抽出した一部の標本を対象に測定（データ収集）を行い、その結果（統計量）に基づき、母集団についての結論を推測する「推測統計」、及び、標本の特徴を数値や図表で要約する「記述統計」を、Excelを用いて学習する。データとしては体力測定データ、競技データなどを用いる。	
	コンピュータプログラミング基礎	コンピュータに仕事をさせるためには、仕事の手順をコンピュータが理解できる言語（プログラミング言語）で書かねばならない。本授業では、プログラミング言語として初心者にもわかりやすいVisual Basicを学習する。プログラムは基本的に、順次処理、選択処理、繰り返し処理を組み合わせることで作ることができる。基礎からある程度応用的なプログラム（たとえば、身長、体重から肥満度を判定するプログラム）の作成を行なう。	
	コンピュータプログラミング応用	コンピュータプログラミング基礎に引き続き、Visual Basicを用いて応用的なプログラム作成（ファイル処理、グラフィックス、スポーツ関連）を行う。また、スポーツ産業従事者あるいはスポーツ指導者には経営的感覚も必要のため、GIS（地理情報システム）ソフトウェアを用いて、スポーツ用品店やスポーツ施設、スポーツクラブなどの分布解析、勢力圏解析を行い、どこに出店するのが効果的かなどを調べる演習も行う。	
	フィットネス経営論	日本では、民間スポーツ施設（フィットネスクラブ等）が各地で普及しており、地域住民のスポーツ活動の拠点として大きな役割を果たしている。民間スポーツ施設の経営は、学校体育や公共施設・地域スポーツクラブの運営と異なり、収益を上げるためのマーケティング戦略や、顧客ごとの要求を満足させるためのプログラム提供、接客マナーなど、サービス業としての側面が重要となる。本講義では、民間フィットネス施設の経営のあり方やプログラムの立て方について学習する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門分野科目 専門応用科目	スポーツ産業論	現代のスポーツ産業は、多様化・複雑化しており、その構造を理解することがスポーツビジネスを展開するうえで重要となっている。本講義では、まず、スポーツ産業を構成する様々な業種とのかかわりを見ながら全体像を把握し、後半では日本、米国を中心としたプロスポーツビジネスの仕組みを理解する。授業では事例も多く取り上げながら、実際のスポーツ界では今何が起きているのかを授業内容と結びつけて考察する力を養いながら、スポーツ産業への理解を深めていくことを目的とする。	
	スポーツマーケティング論	スポーツ産業界の広がりとともに、各種のスポーツ事業においても、ビジネスという認識が不可欠となり、マーケティングの知識が重要となった。そこで、本講義では、マーケティングの基礎を理解するとともに、スポーツビジネスにおいて「顧客が真に求める商品やサービスを作り、その情報を届け、顧客がその商品を効果的に得られるようにする活動」とは、具体的にどのようなことかを学習する。	
	スポーツメディア論	スポーツはメディアにとって重要なコンテンツであり、テレビ・新聞はもちろん、近年ではインターネットでも取り扱われることが多くなってきた。メディアによる報道は、スポーツの進化、普及に貢献する側面を持つ一方、メディアの報道の形態によってルール改正が行われたり、選手が企業の宣伝材料に利用されるなど、スポーツとメディアとの関わり方についての問題が取りざたされることも生じている。本講義では、スポーツとメディアとの関わり方について、上述した利点や問題点を正しく理解することを目的とする。	
	安全管理論	本講義では、各種スポーツにおける安全管理の基本的事項について確実に理解が深まることを目標とする。最初に、スポーツのリスクマネジメントについて概説した上で、屋外スポーツの安全管理について、地形地質学的観点や土木工学的観点からの知見も加味しながら説明する。さらに、屋内スポーツの安全管理についても説明するとともに、学校管理下の事故事例について、その状況や事故防止対策について説明を行う。最後に、救急対策や補償対策、法的責任についても言及する。	
	企業インターンシップ	スポーツ健康科学部におけるインターンシップでは、キャンパス内で実施することが困難なキャリア系の体験教育を可能とするために、学外諸機関と連携してインターンシップ型の実習授業を行う。特に、教養で行われるインターンシップと区別し、専門科目におけるインターンシップでは、主たる研修先をスポーツあるいは健康関連の団体（NPO法人）や企業に設定し、専門分野に特化した体験を行う。	
	スポーツマネジメント	体育・スポーツに関わる学校、行政、地域、組織、企業、メディア等におけるスポーツ振興や政策立案を自在に行ったり、現代社会のニーズに即した効果的な体育カリキュラムを編成したり、競技スポーツ現場におけるパフォーマンス向上のための育成・強化方針の提示など、「ヒト・モノ・カネ・情報」を合理的に活用する、スポーツ界をグローバルに担うべく、牽引者となりうる専門家を養成することを目的に、自在に政策立案やマネジメントを展開していける能力を学ばせる。	
	野外スポーツ	自然体験活動は、単に個人的に楽しむ活動ではなく、人や周囲の環境と接しながら行う社会活動ともいえる。自然の中での活動を通して人に対するルールやマナーの必要性を理解し、また安全教育、環境問題等の理解を深める。水辺活動を経験し、野外活動の理解を深めるとともに、野外活動の教育者として安全管理や自然活動の運営について学ぶ。	共同
	スポーツと社会	現代社会におけるスポーツの役割は多様化している。政治や経済との関係性が強まるほど、スポーツの社会的意義を読み解く力が必要とされ、地域の実情を理解し、課題の構造を見極めることが求められている。本授業では、現代社会におけるスポーツのさまざまな現象を社会的視点からとらえ、これらの特徴や問題点を探りながら、スポーツの社会的見方と考え方を習得する。また、スポーツプロモーションの観点から自身とスポーツの関わり方、スポーツと社会の望ましい在り方について検討する。	
	地域とスポーツ	地域におけるスポーツの役割は、地域コミュニティの活性化はもとより、健康づくりのための具体的方策として、あるいは、生きがいを持った生活を営むためのツールとして活用される。本授業では、青年期、壮年期、あるいは高齢期に実際に行われている健康運動教室やスポーツイベントの事例を挙げながら、スポーツを活用した地域の施策、あるいはスポーツが地域にもたらす影響について講義する。加えて、近年各市町村で立ち上げられている総合型地域スポーツクラブの理念、現状等についても説明する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門分野科目 専門応用科目	運動指導論Ⅰ	ライフステージに応じた運動実践は、健康で生きがいのある生活を営む上で必要不可欠であり、その指導は地域のスポーツ指導において重要なテーマである。本講義では、成人期を対象とした健康づくりのための運動指導法について学習する。具体的には、個々の身体機能や状態に応じた安全で効果的な運動を実施するための運動プログラムの作成法や指導法、また、生活習慣病にかかる可能性のある者への個別指導・健康支援法について講義する。本授業を通して、成人を対象とした健康運動指導の基本的な理論を理解するとともに、適切な運動プログラムを作成する能力を身につけることを目的とする。	
	運動指導論Ⅱ	運動指導論Ⅰでは、成人期の運動について学習した。運動指導論Ⅱでは、高齢者を対象とする運動指導法について学習する。高齢者に対する健康運動指導は、近年、市町村レベルでも盛んに行われているが、成人に比べ、高齢者は各種身体機能の低下や転倒恐怖など、運動指導を行う上で配慮すべき点が多く、これらを無視した指導を行うと重大な事故につながりかねない。つまり、転倒に関する要因や、およびそのリスクを軽減するための方法など、安全面にも最大限配慮したうえで、効果的な運動プログラムを提供することが求められる。加えて、身体活動量の低下がQOL（生活の質）や生きがいにも影響を及ぼすことから、精神的な側面も含めて運動指導にあたる必要がある。よって、本授業では、高齢者特有の諸問題を考慮したうえでの効果的な運動指導法について理解するとともに、適切な指導技術を習得することを目的とする。	
	スポーツ心理学	運動・スポーツは身体面だけでなく、心理面との関わりも重要である。運動・スポーツ場面での心理・行動に対する理解を深めるために、スポーツ不安とパフォーマンスとの関係、動機づけのメカニズムと方法、運動学習、対人認知、コミュニケーション理論、グループ・ダイナミクスなどについて学習する。あわせて、スポーツパフォーマンスを向上させるための各種心理的スキルトレーニングや心理サポートについて、それらの理論的背景についても学習する。	
	スポーツコーチング論	ヒトの発育・発達過程を理解したうえで、育成・強化行動や指導行動に関わるマネジメントする能力を養い、国際競技力を獲得することができる指導者の資質を身につける。具体的には、選手とコーチの立場を客観的にとらえて、選手・集団・チームの能力を最大限まで引き上げ導くリーダーシップと、適切な人間関係を構築する能力、常に変化する状況に対応できるマネジメント力、直面する諸問題を速やかに解決できる資質を養うスキルなどを獲得することを目的に学習する。	
	発育発達学	子どもの体力低下に加え、心身の健康、遊び、運動、生活習慣、生活環境など、さまざまな視点から子どもの発育発達に関する知識を習得することは重要である。本授業では、子どもの発育発達に関する多様な課題に取り組めるようになるため、人間の成長や発育発達をさまざまな視点から捉えるとともに、各ステージでの特徴的な変化を取り上げて講義する。加えて、子どもの身体活動ガイドラインを理解し、適切な運動プログラムが提供できるようになる。	
	スポーツ医学	スポーツに関連する内科、整形外科的疾患や障害についての概観を理解することを目的とする。具体的には、前半で身体機能の理解と、様々なスポーツ障害やその予防、リハビリテーションなどに関する基礎的事項について、概要を理解するとともに、後半では、年代や競技種目ごとに発生しやすい疾患や障害について個々の特性を踏まえて学習する。最終的には、指導者として、スポーツ障害・外傷を未然に防ぐ、あるいは、障害・外傷が発生してしまった場合に、医療現場のスタッフと上手にコミュニケーションが取れる知識を身につけることを目標とする。	
	栄養学	糖質、蛋白質、脂質、無機質、ビタミン、食物繊維などの栄養素の働きをはじめ、酵素や補酵素の働き、骨（骨の仕組み・骨の形成・骨の働き）や体脂肪などについて、生理学的に解説する。さらに、グリコーゲンローディング（カーボハイドレイトローディング）の仕組みや、運動と消化機能との関わり、また、スポーツ競技の成績を左右する試合当日の食事などについて、わかりやすく論述する。	
	コンディショニング論	スポーツの指導では、選手のコンディショニングを調整するために、科学的な根拠に基づき心身の両面からのサポートが重要となる。よって、本講義ではスポーツ実践者（競技者）が目標とする競技活動において最高のパフォーマンスを発揮するための要因、具体的な方法の実際を競技特性を踏まえ学ぶ。また、傷害予防のためのアプローチ、そのための環境作りの方法を学ぶ。さらに、一般人を対象とした健康運動指導時にも、安全な運動を行うためのアプローチが重要となることから、子どもや高齢者を対象とした運動時に求められるコンディショニングの知識についても学習する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門分野科目	専門応用科目	健康体力学	現代日本社会の抱える問題の一つに、少子高齢化が挙げられる。健全な日本社会を築くためスポーツを通して貢献する人材として必要な健康および体力に関する基本的な捉え方を習得する。前半では現代日本の健康問題と生活習慣病およびその対策について必要な基礎知識を解説し、後半では体力を各種体力要素別に捉え、スポーツやトレーニングとの関連性について解説する。また、受動的な授業とならないよう学生自身の問題として捉えるために自己のトレーニング計画などをレポート課題とする予定。	
		トレーナー・リハビリテーション演習	スポーツ選手が、最大限のプレーを発揮出来るように、身体の調整をサポートするトレーナーの業務について、理論と実践の両面から学習する。 具体的には、選手の記録アップや運動能力の向上のためのメニュー作り、栄養や水分摂取の調整、ストレッチなどのコンディション調整、ケガをした選手が回復し競技に復帰するまでのケアやリハビリメニューの立て方を理解するとともに、マッサージやストレッチなどの技術の修得を目指す。	
		学校保健	肥満、骨折、貧血、子どもの生活習慣病、ストレス、食物アレルギー、朝食抜き、無理なダイエット、偏食、無理なダイエット、生活習慣の乱れ、柔軟性低下、筋力低下、体力低下、スポーツ障害・外傷、交通事故・水難事故、テレビゲーム、手先の不器用さ、喫煙、虫歯などについて、そのぞれ子どもの健康問題の原因や予防法などを生理学的に幅広く論述する。さらに、教科書や視聴覚機器などを活用して講義を行い、内容に関して受講学生に質問をしながら、わかりやすく講義を行う。	
		救急処置	体育・スポーツ活動では、障害・外傷や熱中症など、予期せぬ事故が発生する。よって、スポーツ指導に関わるスタッフは、安全管理の観点からも、救急処置についての正しい知識を持つとともに、実際に処置を施すことができる技術の修得が必要となる。本講義では、救急処置の全体的な流れを理解するとともに、テーピング固定、RICE処置、心肺蘇生、AEDの使用法などを中心に、具体的な症状に合わせた救急処置の方法を、演習を踏まえながら理解・習得することを目指す。	
		衛生学・公衆衛生学	衛生学及び公衆衛生学の違いを解説し、衛生統計・老人保健をはじめ、栄養（栄養素の働き・生活習慣病・外食産業・エネルギー消費量・栄養所要量・活性酸素・ダイエットなど）、運動（生活習慣病・加齢〔寿命〕・日常生活活動量〔エネルギー消費量〕・体力・有酸素運動など）、ストレス（体脂肪〔肥満や拒食〕・自律神経失調・内臓〔糖尿病や癌〕・鬱病・自殺・過労死・テクノストレス・ストレス耐性・ストレス解消など）の衛生学及び公衆衛生学的内容について論述する。	
	ライフスタイルと健康	本授業は、これまで学習してきた健康科学の講義の総まとめとして位置づけている。地域のスポーツ指導者は、トレーニングや生活習慣病等に関する基礎知識を十分に理解した上で運動プログラムを作成しなければならない。しかし、個々に合った運動プログラムを作成する際、対象者の年齢や性別に加え、職業や地域特性といった条件も加味する必要がある。特に成人期における勤務時間は1日の3分の1を超えており、就業内容の影響が個人の健康や体力に与える影響は大きいと考えられる。本授業では、様々な生活条件を考慮した応用的な健康運動指導が可能になるために、ライフスタイルが健康に及ぼす影響について理解することを目的としている。		
	ヘルスプロモーション論	現代人のライフスタイルに注目し、飲酒（飲酒の悪影響や健康的な飲酒法）、喫煙（喫煙の悪影響や禁煙対策）、ストレス（ストレスの悪影響、ストレスの原因や解消法）、運動不足（運動不足の悪影響、運動の予防医学的効果、運動実施時の注意点など）、栄養のアンバランス（骨粗鬆症、高血圧、動脈硬化、貧血）、無理なダイエット（無理なダイエットの害や原因、健康的なダイエット）、食べ過ぎ（食べ過ぎの原因や肥満）、朝食抜き（朝食抜きの悪影響やその原因）、夜更かし（夜更かしの悪影響や眠れる工夫）などについて、生理学的に論述する。		
	体づくり運動	体づくり運動の授業では、体ほぐしや体づくりの運動についての具体的な実施方法について学ぶことに加え、体力の構造・要素を踏まえ、向上させる体力要素を選択すること、また、その体力要素の向上に適した運動を取り入れること、トレーニングの原理・原則を踏まえ、具体的なねらいを定めた運動実施計画を立てられるようになること、体力の状態を的確に把握するために必要な測定・評価が行えるようになることを目的としている。本授業を通して、自らの実生活において健康や体力の向上を意識した運動習慣を身に付けるだけでなく、指導者として、体づくり運動を指導する際の指導法も併せて身に付けることを目標としている。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門分野科目	専門応用科目		
	体カトレーニング	体力トレーニングの方法は、トップアスリート、健康増進を目指す人々、高齢者、ジュニア期の子ども、また、疾患を抱えている人々など、年代や目的によって様々である。ウエイトトレーニング機器、自重、ラダーを用いたトレーニングなどを、実技を通して実施することで、それぞれのトレーニングの特徴と実践方法を理解する。さらに、運動プログラムの作成を通じて、それらのトレーニングについて指導ができるようになることを目的とする。	
	陸上	本講義では運動の基本となる走・跳・投技術取得とその理論について学び体得することにより、各スポーツ種目のパフォーマンス向上に結びつけ、さらに運動指導方法について学ぶ。陸上競技のトラック・フィールド種目（短、長距離・跳躍・投てき）を専門的に行う。各種目の運動要領を身につけ、自己の最高記録に挑戦するなかで陸上競技の楽しさを知る。また、講義では対象種目のルール、技術の発展、歴史、基本的なトレーニング理論を理解する。	
	水泳	水泳では、初心者段階において修得しなければならない「水慣れ」、「浮き身」、「呼吸法」から学び、多様な泳法技術習得へと展開していく。具体的には、各種泳法（クロール、背泳ぎ、平泳ぎ、バタフライ）固有の技法を学び、よりリラックスした泳法を学習する中で、スポーツ指導者として最低限必要とされる泳力を確実に体得させる。さらに水泳指導現場で身につけておかなければならない水上、水中での安全対策や救急処置への配慮について学ぶ。	共同
	ゴール型スポーツ A (バスケット)	バスケットボールにおける基本技術であるシュート、レイアップ、パス、ドリブルなどを習得する。基本技術は、個別の技術練習とゲーム練習を併せながら習得する。基本技術を連携させた応用技術では、ディフェンスおよびオフェンスの切替えを学習する。また、ゲームの原点は「陣取り合戦」である。個人プレイではなくチームワークを重視することを意識し、守備および攻撃時におけるそれぞれの動きを理解する。加えて、バスケットボールについての基本的な知識や技能のみならず、教育・指導現場において必要な指導スキルを獲得する。	
器械体操	器械体操は非日常的な要素が多く含まれているため敬遠されがちである。しかし、その運動の多くは身体支配能力など体力・運動能力・空間での身体調整能力などを高めるための基礎であり、大変重要な役割を担っている。本授業は学習指導要領に取り上げられている技を系統的・段階的に指導し、その技の習得を図る。また、安全に実施できるための助手法についても習得することを目的とする。技および助手法の習熟度についてはVTRを使用し、視覚情報からも相互評価ができる能力を養うことを目的に授業を展開する。	集中	
専門分野科目	柔道	本授業では柔道の基礎的な知識・技能の習得と、その指導法についての学習に重点を置くと共に、正しい礼法の知識や、相手を尊重する精神等、柔道の持つ教育的価値の理解とその指導法について学習する。そのために、柔道の技術構造・技術の理合を理解すると共に、基本動作と基本となる技の習得、安全な攻防と乱取り稽古などの習得を目指す。	集中
	ゴール型スポーツ B (サッカー)	サッカーの基礎技術である、ドリブル、パス、シュートの習得及び確認を行い、サッカーのゲームを行うために必要な技術を身に付ける。また、ボールを操作しながら周りを見る、空間に走りこむ、といった、ゴール型スポーツの特徴である動きも、仲間とコミュニケーションを取りながら行えるようになるとともに、身に付けた基礎的な技術を、ゲームを通じて応用に繋げられるようになる。さらに個別スキルや集団戦術を体系的に指導するための学修計画を作成できるようになることも目的とする。	
	ネット型スポーツ A (バドミントン・テニス)	球技の中でも、ネット型スポーツはネットを挟むことによって相手コートに侵入することなく、そして相手との身体接触の危険がなく攻防を楽しむことのできるスポーツである。その中でも、バドミントンやテニスにおいては、ラケットという道具を用いるスポーツであることから、その特性を生かしたプレーを習得する知識と技術を学び、生涯スポーツとして楽しむことができるように学習者を指導する技術や指導計画の立て方についても合わせて学習する。	
	ベースボール型スポーツ	投げる、打つ、走るという運動が備わったベースボール型スポーツは、地域スポーツ活動でも広く普及しており、学校体育でも指導要領に取り上げられており、体育・スポーツの指導教材として利用価値が高い。本講義では、投球、捕球、打撃の基礎技術の修得、実践的な練習を通してベースボール型スポーツに必要なフォーム・プレイングの学習、およびその指導方法を理解することを目的としている。また、学校教育での指導も考慮し、教科内容の系統性を意識した教材づくりを学習する。	

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ダンス	リズムにあわせて動くことの楽しさを体験したうえで、オリジナルの教材により作品を完成させ、ダンスの基礎となる動きや表現技術を作品の中で学べるようにする。対象者をあわせてアレンジできる能力を養うことを意識し、指導現場で実践可能な内容を中心に授業を構成する。具体的には、規定の踊りをマスターすることからスタートし、表現の技術、コミュニケーションダンス、用具を使ったダンスの方法を学習し、最終的には自ら振付を考えるとところまでを学習する。	
	ネット型スポーツB (バレーボール)	バレーボールにおける基本技術であるパス（オーバーハンド及びアンダーハンド）、スパイク、サーブ、トス、ブロックならびにレシーブを習得する。基本技術は、個別の技術練習とゲーム練習を併せながら習得する。基本技術を連携させた応用技術では、守備からの攻撃や攻撃からの守備への切替えを学習する。バレーボールは、ポジション別にチームにおける役割が異なるため、役割を理解し、守備及び攻撃時におけるそれぞれの動きを学習する。また、6人制及び9人制のルール、審判の方法及び競技の運営方法を理解する。	
全学 共通 科目	卒業研究	教員の指導の下で設定した卒業研究のテーマおよび研究方法にしたがって実際に実験または調査を行い、得られた結果を考察する。中間発表会において、研究の進捗状況を報告して研究の進め方を確認し、最終成果を卒業論文としてまとめ、卒業研究発表を行う。これらの過程を通して、専門職業人として必要される問題解決能力、論理的思考力、創造力を身につけるとともに、論理的な文章の書き方、優れた表現力、プレゼンテーション能力を修得する。	

授 業 科 目 の 概 要				
(スポーツ健康科学部スポーツ健康科学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
全学共通科目	教職に関する科目	教 職 論	教師を目指す学生に対して、まず、教職とは何か、教職はどのように成り立ち、社会が変化の中でどのような変貌を遂げて現在にいたっているのかを素描し、その上で、その職務の重要性、具体的な職務内容、教職をめぐる様々な課題、教師としての職能成長などをなるべく具体例を提示し、それに基づいて学生自身が研究討議することを重視する。	
		教 育 原 理	「教育原理」は、教育の本質、目的、内容、方法などの基本的な原則や、諸実践上の理論的な基礎を明らかにしようとする学問である。今日、個性重視の教育思潮は進んでいるが、他方、教育荒廃への危機感が強い教育界の現状を考えると、教師の教育実践への認識が一層求められている。教育を巨視的にとらえ、教育活動を取り巻く制度や社会の様相などに触れながら、原理を講じたい。	
		教 育 心 理 学	教育心理学とは、「教育」という事象を、心理学の観点から理論的・実証的に明らかにすることを目的とした学問である。本講義では、特に、学校教育において授業実践、学級経営を行う上で必要な基礎的な理論を習得した上で、実際の教育実践へ生かすための視点を提供することを目的とする。そのために、学習や教授スキルについての心理学の理論を学び、生徒の発達と学習に関連すると考えられる環境要因について理解を深めることとする。	
		発 達 心 理 学	発達心理学とは、人間の「発達」という事象を理論的・実証的に明らかにすることを目的とした学問である。本講義では、児童生徒の発達と学習についての心理学の理論を学び、児童生徒の発達と学習に関連すると考えられる環境要因について理解を深めることを目的とする。さらに、「学校教育」において、児童生徒の理解を深めるために必要な基礎的な理論を習得し、発達段階に応じた児童生徒理解とその指導に生かすための視点を習得することを目指す。	
		教 育 社 会 学	教育は、学習者の「①心理的発達と②社会的環境」の両面の「③相互交流・相互作用」で成り立つ。「教育社会学」は、「②社会的環境」とのかかわりの過程そのものを対象としながら教育を考え、「教育に対する社会の影響、教育の社会的な機能を実証的な方法で検証する」教育研究の分野である。教育が社会進歩のやくわりを担うことを期待する発想の新しい学問である。計画に掲げる各テーマについて、実証的に講じたい。	
		教 育 課 程 論	学校の教育活動の全体計画である教育課程の意義や基本構造を、具体事例に即してその歴史の変遷を辿ることによって理解する。また、他の国と比較しながら検討することで、日本の教育課程の特徴を知る。その上で、教科外活動、総合的な学習の時間、キャリア教育、環境教育、メディア・リテラシーなどの今日的な課題について考察する。	

全学共通科目 教職に関する科目	保健体育科教育法では教科「保健体育」の教育方法上の原理を明らかにし、保健分野では主に将来の健康行動を科学的に思考し、意思決定をすることのできる能力の形成、体育分野では各種スポーツを教材としながら「生涯スポーツ」をキーワードに、健康体力の維持向上に必要な知識、実践力の形成を目指す。具体的には中学校・高等学校における保健体育科の目標・学習内容、指導法などについて学習指導要領解説-保健体育編-に基づき学習し、教科の特性を生かした指導方法論及び指導技術を実践できる能力を養成する。  (オムニバス方式/30回) (6 戎 利光/11回) 16. 保健科教育法とは何か 17. 保健科教育法の変遷 18. 保健教育の今日的課題 19. 保健の目標 21. 保健分野の学習内容II 22. 保健分野の学習内容III 26. 保健分野の学習内容VII 27. 保健分野の学習内容VIII 28. 保健の学習指導計画とは 29. 保健の学習と評価 30. 保健教育内容 (7 島田 茂/5回) 9. 体育分野の学習内容IV 13. 体育の学習指導計画とは 14. 体育の学習と評価 15. 体育教育のまとめ 20. 保健分野の学習内容I (⑤ 野口 雄慶/6回) 8. 体育分野の学習内容III 11. 体育分野の学習内容IV 12. 体育分野の学習内容VII 23. 保健分野の学習内容IV 24. 保健分野の学習内容V 25. 保健分野の学習内容VI (11 栗本 宣和/6回) 1. オリエンテーション 2. 体育科教育法とは何か 3. 体育科教育法の変遷 4. 体育教育の今日的課題 5. 体育の目標 6. 体育分野の学習内容I (12 辻本 典央/2回) 7. 体育分野の学習内容II 10. 体育分野の学習内容V	オムニバス方式
	保健体育科教育法では、すでに履修した「保健体育科教育法I」において、学習指導要領に準拠した中学校・高等学校における保健体育の目標、指導内容、指導方法などについて学習した内容や、教科に関する専門科目で学習した内容を踏まえ、教育実習で重要な位置を占める保健体育科の学習指導案の立案と、それに基づく模擬授業を通じて、教育現場における指導の実践力を身につけることを目的とする。  (オムニバス方式/30回) (6 戎 利光/13回) 18. 保健体育のねらい 19. 授業の展開の工夫 20. 授業の評価 21. 指導案の書き方(1) 22. 指導案の書き方(2) 23. 指導案の書き方(3) 24. 指導案の書き方(4) 25. 模擬授業による指導案の検討(1) 26. 模擬授業による指導案の検討(2) 27. 模擬授業による指導案の検討(3) 28. より良い保健授業展開のために 29. 保健の授業の実際 30. 試験と全体のまとめ (7 島田 茂/6回) 9. ミニ模擬授業による指導案の検討(1) 10. ミニ模擬授業による指導案の検討(2) 11. ミニ模擬授業による指導案の検討(3) 12. より良い体育授業展開のために 13. 模擬授業の実践(1) 14. 模擬授業の実践(2) (11 栗本 宣和/11回) 1. オリエンテーション 2. 体育授業のねらい 3. 授業の展開の工夫 4. 授業の評価 5. 指導案の書き方(1) 6. 指導案の書き方(2) 7. 指導案の書き方(3) 8. 指導案の書き方(4) 15. 体育の授業の実際 16. 体育授業で扱うその他の教材(1) 17. 体育授業で扱うその他の教材(2)	オムニバス方式

全学共通科目 教職に関する科目	特 別 活 動 論	<p>我が国は、社会構造の複雑化、多様化、そしていまだかつて経験したことのない少子化・高齢化社会の中で、特別活動の持つ教育的目的や意義を理解させるとともに、社会の要請にこたえるべく生徒の自治能力や自発性を高め、真の学校教育の実現のため、特別活動趣旨、目標、内容、その取り扱いなどについて口述していきたい。</p> <p>また、特別教育活動の実践を、学校を訪問して調査し、目標と内容がどのように展開されているか考えさせたい。</p>	
	教 育 方 法	<p>教育目標を達成し、学習の効果を上げるためには、適切な教育方法・技術は不可欠である。本講義では、教育の方法・技術の理論を理解し、学校教育において授業実践を行う上で必要な知識とスキルを習得することを目的とする。そのために、授業の計画、実践、評価、授業研究の各プロセスに必要な知識とスキルを学習し、最終的に授業実践に向けた授業案作成を目指す。また、パソコンや視聴覚教材を含む教材の効果的な活用についても取り扱う。</p>	
	道 徳 教 育	<p>社会の急激な変化に伴い、人間関係の希薄化、規範意識の低下がみられている。この中で、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を培い、自立し、健全な自尊感情を持ち、主体的、自立的に生きることができ、他者とのかかわり、社会の一員としてその発展に貢献することができる力を育成するための、基盤となる道徳性を養うための基本的考え方、教育方法論について具体例をあげながら、学生自ら心に残る道徳教育を考えてもらうことを意図している。</p>	
	生 徒 ・ 進 路 指 導 論	<p>生徒指導は、学校教育において、学習指導や特別活動などの教育活動、また児童生徒の人間形成において不可欠である。そのために、本講義では、生徒指導の歴史的経緯や定義、理論をふまえた上で、現在学校で行われている生徒指導体制のシステム、児童生徒理解のための方法などについて学習することを目的とする。さらに、現在の学校で生徒指導上の問題となっている、不登校やいじめの事例を通して、児童生徒への支援方法について、教育者としての視点から考える視点を養うこととする。</p>	
	学 校 教 育 相 談 I	<p>教育相談は、生徒それぞれの発達に即して、好ましい人間関係を育て、生活によく適応させ、自己理解を深めさせ、人格の成長への援助を図ることを目的に実施されるものである。そのために、本講義では、まず、教育相談の背景となる発達心理学や臨床心理学の理論を学習する。さらに、体験的に学習することを通して、教育相談の面接の技法や生徒の社会性や人間関係を育成するための技法の習得を目指す。</p>	
	学 校 教 育 相 談 II	<p>今日の中高生が抱える悩みは、複雑化かつ深刻化しており、表面上は気づきにくい場合も多い。この科目では、中学・高校教師を目指す人のために、今学習すべきこと、教師として多感な生徒たちに対して、どのようなことに配慮しながら、どのようにかかわっていくべきかについて学び、学校で効果的な教育を行ううえで必要な知識を習得することを目的とする。そのために、事例を挙げながら、いじめや不登校といった今日的な課題への対処について学習していく。</p>	
	教 育 実 習 I	<p>高等学校での教育実習に臨むにあたり、教育実習の意義と役割及び教育活動全般について、十分な知識と理解を深めるとともに、実習校における教育実習の「心構え」や学習指導及び生徒指導、進路指導に関する実践的な指導力の素地を養成することを狙いとする。特に、事前・事後指導を通して、効果的な教育実習がなされるように、教育活動に関する実践的な内容・方法について学ぶものとする。</p>	集中
	教 育 実 習 II	<p>中学校での教育実習に臨むにあたり、教育実習の意義と役割及び教育活動全般について、十分な知識と理解を深めるとともに、実習校における教育実習の「心構え」や学習指導及び生徒指導、進路指導に関する実践的な指導力の素地を養成することを狙いとする。特に、事前・事後指導を通して、効果的な教育実習がなされるように、教育活動に関する実践的な内容・方法について学ぶものとする。</p>	集中

全学共通科目	教職に関する科目	教職実践演習（中・高）	この科目は、教職課程のすべての科目の履修や教育実習等様々な活動を通じて得た知識や体験が、教員としての最低限必要な資質や実践的な能力の形成につながっているかを最終確認するものである。特に、教員として求められる①使命感や責任感、教育的愛情など②社会性や人間関係形成能力③生徒の心情・行動を理解する力や学級運営能力等④教科内容等の指導力に関する事項について、望ましい教員像や各教職科目の到達目標に照らして、事例研究、役割演技やグループ討議、実務実習、現地調査などの多様な実戦・演習および研究協議を通して総合的に確認することがこの授業の到達目標となる。	
		体 育	教育に関する体育について、体育授業の目標および教材を基にし、指導案の作成、模擬授業等で授業の進め方などを覚える。また教材として、運動・スポーツ、発育発達などの科学的知識を理解し、教師を志す学生に実践的な能力を身につける。	